

第2分科会「コミュニティワークにおける地域通貨の可能性」

日程／8月30日（木）

15:20～17:00、 パネルディスカッション

コメンテーター／龍谷大学法学部教授(元逗子市長)
富野 暉一郎

コーディネーター／(財)滋賀総合研究所 秦 憲 志

司 会・進 行／(財)滋賀総合研究所主任研究員
奥野 修

司 会／地域通貨おうみ委員会事務局長
上林 眞弓

②草津コミュニティ支援センター

代表理事 仲野 優子

草津コミュニティ支援センターは1998年に設立した公設市民営の市民活動の中間支援センターである。建物の管理はコミュニティ事業団が行い、運営は当初から市民に委ねられており、専従職員はおらず、15人のボランティアで対応している。活動場所の支援、ネットワーク、パートナーシップの推進、情報発信、研修講座、相談などが主な業務である。

公設市民営が全国的な流れとなっているが、4年前には前例があまりなく、皆で運営を積み上げてきた。当初は自主運営のため全団体に事務局への参画を義務づけ、サポートセンターとしての基盤づくりを進めた。2年目には運営団体と利用団体とに分けての登録方法をとった。センタークーポン、後の「地域通貨おうみ」の仕組みが誕生したのも、2年目の活力ある活動の成果であった。3年目にはセンターの運営責任が大きな課題となり、全ての利用団体が運営に責任・役割を持ち事業部を活性化していくことになったが、登録団体の加入目的はセンターの運営ではなく、市民活動を通じて市民の生活の質の向上、まちづくりのアクションを起こすのが責務であり、その事業をサポートするのが、中間支援組織であるセンターだという当たり前のことが出てきた。また、おうみ事業部が独自の活動を広げる中で、コミュニティワーク、コミュニティビジネスの概念もたらされ、その独立がアクションを起こす側と支援する側の関わり方の違いを鮮明にした。4年目はセンター事務局が貸館業務と情報発信などの実務を中心に行い、センター事業に責任を持ち方向性を提起する理事会とて機能分担した。

③地域通貨おうみ委員会

事務局長 山本 正雄

「地域通貨おうみ」は、お金ではなく相互扶助のシステムである。「三方よし」の地域社会をつくっていくツールとして活用していきたい。コミュニティの再構築、ボランティア活動強化、地域の資源を活用した地域経済の活性化を図っていく。「おうみ」の特徴は、紙の券を発行し、発行の際に市民基金を集め、それと連動させていることである。100円カンパいいただいたときに1おうみを発行する。イサカアワーがモデルとなっている。支援センターの中ではクーポン券を使っていたが、お金ではなくコミュニケーションツールであるとのイメージを強く打ち出すため、名刺サイズのものに改めた。

「おうみタウン」の発行や、手作り品を持ち寄り「おうみ」で交換する「おうみマーケット」を月1回開催している。事業所の協力により、映画鑑賞やタクシーにも使える。この4月から、「ひとの駅」という交流の場を設け、そこを拠点に

概 要

1.活動報告

①特定非営利活動法人NPO子ども

ネットワークセンター天気村

代表理事 山田 貴子

いつの時代も未来を担う子どもたちには元気でいてほしい。子どもたちを取り巻く環境を考え直し、20世紀から21世紀を生きる同世代の人間として子どもにどんな未来を託そうとしているのかを考え行動しなければとの使命を感じ、1987年、任意団体天気村を設立した。1999年にはNPO法人格を取得し、現名称に改め、ネットワークの活動へと幅が広がった。

本来事業は、子どもたちの参加型体験学習をプログラムする子どもサポートシステム事業と、きめ細かな大人自身をコーディネートするファミリーサポートシステム事業の2つ。本来事業での財源を基本に拡大を図るべく、提案型事業を打ち出してきている。地域行事に参加しながらの参加型ボランティア育成にも努め、市民が楽しく、自主的に参加し、世代を超えて地元に関心を持ってもらえるよう、意識改革を期待しての活動を展開しており、地元企業や商店街、農地、里山の所有者等、地域との太いネットワークが広がっている。

社会が変わった、社会のコミュニティがなくなったなどと社会を客観的に見ているような言葉をよく耳にするが、私たち一人ひとりが社会を作っているという当たり前のことについて原点に戻って感じてほしい。子どもたちにはまわりの人を好きになってほしい。思いやりを持って行動できる子どもたちを育てていきたい。人と人とのつながりだけでなく、人と物、自然、空間・時間の流れを立体的、包括的、絶対的に一つ一つ、つなげていくのが天気村のコミュニティワークである。

活動している。「おうみ」のシステムを貸し出して、各団体の活動を支援している。

地域通貨は市民のお金といったいい。呼び名もエコマネー、タイムダラー等様々で、総称して地域通貨と呼んでいる。お金が社会的問題を引き起こし、運用が難しくなっている中で、それを補完するものとして全国約100地域で導入・検討され、注目されている。1998年秋にNHKで「エンデの遺言」が放映され反響を呼んだ。地方分権が進む中、これからの市民社会を支える仕組みとして注目されており、まちづくりやコミュニティ、地域経済の活性化などいろいろな可能性を持っている。



2. ディスカッション

仲野 支援センターでは今年からは、スタンプ帳を使っている。センターを支えるセンタークーポンとまちづくりを支える「おうみ」の役割を整理し、「おうみ」の使用を中止した。ツールとしての「おうみ」を循環させるコミュニティの母体づくりをサポートするのが支援センターの役割である。

山田 地域にある人材や場所という子どもたちにとっての財産をつなげていくツールがエココイン。子どもがエココインを集めるうちに環境、福祉、教育等様々な分野で体験でき、子どもが変わっていく。コミュニティが世代を超えて楽しく広がってほしい。

富野 地域通貨に夢と希望を感じている。決まったものがあるのではなく、試行錯誤の中で、我々が作っていくプロセスにある。共同社会が崩壊し、我々は政府や権力の力で生かされており、自分の人生を自分で把握していない。連帯ある社会の再構築のため、地域通貨の触媒作用に期待している。地域通貨には、地域における我々の手の中に入る自分たちで把握できる循環システムを作り上げるという側面がある。1つのシステムに固執せず、まとまりきらなかったら別れる、こういう地域社会ができていくことはすばらしい。

山本 閉塞的な社会状況に希望を与えるものとしてブームになっているが、1つの潮流として定着させていく必要があり、その真価が問われている。今後は、福祉、教育等それぞれの目的ごとに導入されていくのではないかと。地域通貨が1つの地域内でセクター間の相互交流のツールとして導入されるようになれば地域経営に発展していく。行政がどのように関わるか、税金、法律、コスト等さまざまな課題がある。一極集

中ではなく多極分散で、いろんなところに拠点があって、それぞれうまく活用していけるよう展開していきたい。

仲野 おうみ委員会を中間支援組織のように捉えている。コーディネーターが必要だが、なかなか難しい立場にいる。

山田 お金本位の感覚が蔓延し、物は作るものから買うものへと性格を変えていき、人のつながりがそれに見合うものになってきた。子どもには働くこと、作ることの実感、お金に関わらず人の思いとして豊かな世界があることを体験し、自分らしく生きる力をつけ、新しい時代精神を創り出してほしい。

奥野 地域通貨は自分だけがよくてため。三方よしの精神が大切である。

富野 地域通貨の可能性として、1つには環境的、経済的、社会的な持続可能型社会の構築に使えるのではないかと。2つには行政のあり方を変えるかもしれないということ。今まで民間サイドで動かしてきた地域通貨に行政がどこまで踏み込むか、地域にどのような責任システムを作っていくのか。

谷口郁男さん(京都府) 天気村に関わったきっかけについて。

山田 中学校の教師をしていて、生徒の個性を活かしてやりたかったができなかった。幼児なら好奇心のかたまりで、それを引き出すのが自分の使命だと考えた。

村上章さん(京都府) 地域通貨の換金について。

山本 地域通貨そのものの循環は難しい面があり、その促進と環境を支える面でファンドを活用している。

奥野 コミュニティワークの今後の展開について

山田 好奇心をいつまでも持ってほしい。違いに対する感受性がよくなる。違いがあるからコミュニティができる。地域の人が違いを認め合いながら、自発的に問題に対処していけるまちであってほしい。

仲野 3年間関わってきたまちづくりセンター、地域通貨もやっと市民の議論に乗ってきた。もう一年くらいは試行錯誤でシステムを変えてもいいのではないかと。

山本 「びわこづち」の流通に力を入れている。先々は大きく展開したいが、今は地道な活動をしている。

富野 今は試行錯誤の段階であり、こうでなくてはならないという議論は止めておいたほうがよい。地域通貨は言われているほど使われていない。市民が使わなければいくら戦略性、ミッションがあってもため。いろんな方向で試してみて市民が選択するところが生き残るというプロセスにある。もう一点、触媒作用と言ったが、触媒作用が自己目的化してはいけない。人と人が直接結び合うのが一番いい。地域のコミュニティを作るという目的意識が逆転しないように組み立ててほしい。市民にこうしてあげるとかではなく、市民と共にあり、自分も市民だという意識を最後まで忘れないことが結構大事なことである。

草津市「コミュニティづくりへのフィールドワーク」

日程／8月31日（金）

- 8:30 大津プリンスホテルより、バスで出発
9:00～ 「子どもネットワークセンター天気村」にて、センターの説明および「エココイン」の紹介。
[徒歩移動]
10:20～ 「地域通貨おうみ委員会ステーション」にて、地域通貨の流通体験。
[徒歩移動]
11:40～ 「草津コミュニティ支援センター」にて、施設等の見学。
[徒歩移動]

JR大津駅を經由して、大津プリンスホテルに到着。

概要

草津市を訪れた参加者は、まず「NPO子どもネットワーク天気村」が取り組んでいる体験活動を通じた教育事業や、エココインの発行による生きた実践活動の環境づくり等の事業の説明を受けました。

続いて訪れた「地域通貨おうみ委員会」では、全国に先駆けて発行された「地域通貨おうみ」の仕組みや交流拠点である「ひとの駅」についての説明を受けました。

次にボランティアによる自主運営の拠点として設置された「草津コミュニティ支援センター」を訪れ、参加者同士の交流の場として、参加者からは各団体の取組みに対して活発な意見が交わされました。

最後は参加者からの提案で、全員で体操をして日程を終えました。



随所で説明を受けながら、徒歩で移動する参加者



途中、「草津宿本陣跡」に立ち寄る



「子どもネットワークセンター天気村」で山田さんから説明を受ける



「地域通貨おうみ委員会ひとの駅ステーション」で金澤さんから説明を受ける



「草津コミュニティ支援センター」での説明に熱心に聞き入る参加者

参加者のご意見・ご感想 —アンケートより—

◎NPO子どもネットワークセンター天気村

- ・子どもたちだけでなく、お母さん同士も、子育てを通じてネットワークを広げている。子どもたちに対して地域社会が果たす役割は大変重要である。その点で大きな期待ができる取り組みである。
- ・子どもが社会参加するきっかけづくりとしての「エココイン」はとてもすばらしい。遊び心や好奇心を育むことは多様な選択肢のある地域社会の成熟には欠かせない試みである。

◎地域通貨おうみ委員会

- ・紙の券、クーポン券のような「おうみ」の疑似体験を通じて、このシステムが人と人をつなぐツールとしての可能性を実感した。
- ・「びわこづち」の実験もおもしろいと思った。相互扶助のシステムとして先ず草津の商店街の中に根付き、市民の中に広がっていくことが大切ではないか。

◎草津コミュニティ支援センター

- ・登録団体の情報ボックスの工夫、施設管理など

でクーポンを使った工夫等、特に郵送をなるべくしない等の工夫に感心した。

- ・草津コミュニティ支援センターはゴミ箱を置かない。ゴミ、紙コップ、食べ残し→生ゴミ堆肥。できることから少しずつ、いらんサービスはやめていきましょう。
- ・市民営でパソコン講座をしていて驚いた。
- ・公設で儲けることの是非はどうだろうか。
- ・コミュニティというのはどれだけ自分の持っている縁をはっきりさせるかだと思った。もっとつないでいって、どれだけ広げられるかこれから楽しみである。

スタッフより

草津コミュニティ支援センター等に登録する市民活動のグループの特徴として、元気でミッションの高いことがあげられます。その個性的なグループが「地域通貨」というキーワードで、自分たちの活動を再確認する機会として、今回の大会は大きな意義がありました。

ご参加いただいた皆さんの前で、報告や議論の場を得られたことが、私たちの励みであり、それぞれの活動に対する今後の小さな自信にもなりました。

ご参加いただいた方々に対して、十分な話題提供ができたかどうか不安ではありますが、今後も様々な取組みにチャレンジし、必ず、どこかで皆様と再交流できることを願っています。

草津コミュニティ支援センター

TEL077 (563) 0932

特定非営利活動法人NPO

子どもネットワークセンター天気村

TEL077 (564) 7868

地域通貨おうみ委員会ひとの駅プロジェクト

TEL077 (562) 1153